

川上弘美氏『三度目の恋』完結記念座談会

日時：2020年3月2日(月)

場所：吉祥寺第一ホテル 楓

参加者（敬称略）：川上弘美（小説家）、山本登朗（関西大学名誉教授・京都光華女子大学名誉教授）、
小山順子（京都女子大学教授）

進行：有澤知世（古典インタプリタ・国文学研究資料館特任助教）

この座談会は、川上弘美さんが『婦人公論』において、48回（2018年1月23日号～2020年2月10日号）にわたり連載された小説『三度目の恋』の完結を記念しておこなったものです。

参加者の山本先生と小山先生は、ないじえる芸術共創ラボ開始時より川上さんとの交流を続けてこられました。



はじめに

◆有澤知世（以下、有澤）

この度は『三度目の恋』連載の完結、本当におめでとうございます。

◆川上弘美（以下、川上）

ありがとうございます。

◆有澤

早速ですけれども、この連載をとおして、特に楽しかったことですか、ご自身にとって新しかったこと、逆に苦勞なことがありましたら、お伺いできればと思います。

◆川上

まず最初に申し上げたいのが、ほんとうにありがとうございましたということです。実際に資料をいただいたのもとてもありがたかったですし、何より山本先生、小山先生、それから有澤先生や小林先生、青木先生、藤島先生、岡田先生と直接お会いして話ができたとするのが私にとってはとても刺激になりました。

文字の上だけの世界ではなく、絵で示してくださったり、人間の口を通してというのでしょうか、そうやって語っていただくとまた全然違う立体的なものになって、それですごくインスピレーションをかき立てられて、私も少しは『伊勢物語』の世界の中に入っていったんじゃないかなというふうを感じられたので、大変だったことはほぼなくて。小説を書くのは大変なんですけどね、この交流に関しては楽しいことばかりでしたね。

『伊勢物語』をモチーフにすること¹



◆小山順子（以下、小山）

前の座談会²でも話題になりましたけれども、『伊勢物語』をモチーフにしたドラマや漫画、小説が『源氏物語』に比べてはるかに少ないのは、やはり短編で、エピソードはあるけれども大きな物語がないからだと思います。今回の2年間かけての長編連載ということで、川上さんご自身で埋めていかれたところが当然たくさんあるわけですが、長編化に当たってのご苦労といえますか、どういうところに意を払われたかということを知りたいです。

◆川上

例えば源氏を映像化したり漫画化したりというのは、結局は『源氏物語』という元があるものをいかにして作者の作品にするかということだと思うんですけど、今回私が行ったのは『伊勢物語』を小説化するということではなかったと思うんですね。『伊勢物語』の断片からその隙間を埋めるという方向へはあえて進まなかったんです。そうではなくて、断片だからこそ想像をたくましくできるということを逆手に取って表現させていただきました。つまり『三度目の恋』は『伊勢物語』ではないと自分では認識しています。

◆小山

川上さんは以前から恋愛小説で、何か事件が起こらなくても、心の動きで何げないやりとりの中で色々なドラマがその中に生まれてくるってような様を描きたいとおっしゃっていた記憶があります。今回改めて通して拝読しますと、特に夫婦の関係というものがとても繊細に描かれています。生矢と梨子が長い間夫婦を営んでいく上でのお互いの気持ちのすれ違いや、愛情が冷めたり復活したりというのが細やかに描かれてると思いました。その辺りは今回、川上さんが描きたいと思われたところなんですか。

¹ なお、『3度目の恋』連載中におこなったインタビュー「『三度目の恋』執筆秘話—『伊勢物語』のかかわりについて—」（2018年12月4日実施）もWEB上で公開している。

(https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/kawakami_interview_301204.html)

² 2018年3月6日におこなった座談会

(https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/ise_taidan.pdf)。

◆川上

そうですね。私は小説を書くときに、計画は立てない方なんです。だからあの夫婦がどうなるかも、実はほとんど考えていなかった（笑）。ただ皆さんとお目にかかったときに、業平はどうしてこんなもてるのかということを追求したくて小説書くつもりですと言った覚えがあるのは確かです。業平の目ではなく周りの女たちの目から見るという、女視線で書くということだけを決めていました。

そして書いているうちにどんどん自分でも分かってなかったことが分かってきて。それも梨子と生矢と現代の夫妻だけだったらもっと深くまではいけなかったんですけども、江戸と平安の男女の恋愛をいくつか梨子の目を通して見ていく。そうすると、平安ってもう想像も付かない、社会制度も人間関係も今とは多分かなり違う社会だったのだなということが書くうちに、先生方に教えていただくうちに、分かってきて、もっとずっと男女の関係性が広がった感じがしたんです。平安のパートは、書けば書くほど視野が開けてゆく気がして、山本先生のご指摘の 22 から 48³ という長い平安期となりました。この分析はすごい、さすが山本先生。

◆山本登朗（以下、山本）

ざっくり数えただけですけど。

◆川上

でもまさにこの長さがわたしの没入を表しているんだと思います。

◆小山

平安時代の結婚制度について、連載開始の前後から、川上さんご自身の納得がいけないとおっしゃっていたと記憶しています。一夫多妻制度の中で正妻がどんな気持ちでいるのかなど。

◆川上

全然分からなかったです。

◆小山

「納得がいけない」とおっしゃっていたので、平安篇になってそれがどうなるかっていうのを私も一番関心を持って読んでいました。読み進めるうちに、こういう形で納得されたのかな、こういうところを川上さんの落としどころとして見付けられたのかなというのがよく分かった気がしました。

◆川上

ありがとうございます。もしこれは間違っているということがあったら後で教えてください。

◆山本

そんなややこしいことは言いません。

恋愛について書くということ

◆山本

私が 2 年前にいろいろお話ししたときには、現代小説は恋愛テーマの小説はなかなか書きにくいということをおっしゃっていて。

³「第 1 回～第 8 回…現代のみ、第 9 回～第 21 回…現代・江戸、第 22 回～第 48 回…現代・平安、次第に倍増していますが、これには何か意図が？」という、山本先生の質問。なお、本座談会に先立ち、各発言者から質問票を提出していただいた。

◆川上

そうなんです。

◆山本

今回それを試みたいというふうにおっしゃっていたんですけど、それについてはどうですか。

◆川上

おおむね恋愛小説は障害がないと、作者も読者も燃えない。結婚して幸せに終わりましたでは、それで終わってしまうので。

ところが障害というものが今の世の中では作りにくい。それならば結婚している者同士が恋愛するという障害があるんですけど、「不倫」に対する今の世間の持っているマイナスイメージは、強力。時代の要請と自分自身の切れるカードがうまくかみあわない感じがしばらくありました。ところがこの小説では、語り手は夫とは違う男と関係を持ったが実際には持っていない。そこに突破口がありましたね。

◆小山

現代の世界でこのお話が完結してしまうと、ただただ息苦しい世界ですよ。

◆川上

そうなんです。ただ単に夫が浮気で妻が苦しむというだけの話。平安があったからこそ現代の中の夫婦の機微を描けた。

◆山本

なるほど。だからだんだん長くなるんですね。

◆小山

姫さんがとても利発というか聡明で、それゆえに男性から見たときに、逆にそれがマイナスになるっていうような描写も何度か出てきたと思うんですけど、この話題もワークショップでありましたね。

◆川上

前回の座談会で、この時代女が利発だった場合どうだったでしょうということをお聞きした記憶もあります。

◆小山

ありましたよね。

◆川上

そうなんです。やっぱりこの姫さんがこれだけいろいろ考える人だったからこそ、話も動いてくれたんです。



「業平」と「生^{なる}矢」

◆川上

そういえば、現代の生矢はとてももてる男で、以前おこなった座談会では小山先生も私も生矢にむかむかしていましたよね（笑）。

◆小山

生矢は空洞だという話がありましたからね。

◆川上

業平という男を矮小化したのが現代の生矢という男なので、小説の最初の部分では、行動としては業平と似たようなことをしているわけです。でも作者としては、全然彼に共感できなくて。平安になって業平のことを私理解できるのかしらって本当に心配してました。

ところが書いているうちに、まず家の構造から始まって、お産のときに女しかないとか、女の場所と男の場所がはっきり分かれているとか、案外男の人たちはちゃんと働いているんだとか、平安でのいろんなことを知って、そうか社会の成り立ちがそうなっているなら男女の間の気持ちも自然に今とは異なってくるんだろうとわかったような気がしたんです。

先生方は、その違うところをいつも研究なさってるんですよね。研究から現代に戻ってくる瞬間は、違和感があったりしませんか？



◆小山

我々は、物語の中に入り込んでいくというわけではないですから。

◆山本

そうですね。

◆川上

なるほど。

◆小山

だから、川上さんの小説を読みながら、本当にそうだったかどうかというのはそれは分からないけれども、平安時代の男女の関係のあり方に肉薄するような気はしました。

◆川上

うれしいです。

◆山本

『伊勢物語』はだいたい男性視点ですから、語り手は男のほうから見てるので、女性のほうから書いておられて、それはすごく面白いというか新鮮だなと思いましたね。

◆川上

ありがとうございます。

◆小山

話が戻りますが、生矢は業平を矮小化した存在だとおっしゃっていましたが、以前にお話した時に、生矢の魅力は何かというお話をしましたよね。確かに魅力的なんだけれどもあまり実のない魅力だという話になりました。

◆川上

はい。

◆小山

ある意味空っぽの存在で。

◆川上

そう、空っぽ。

◆小山

女の欲望を受け止める存在だけれども、本人は実は空っぽなんじゃないかと。それが平安時代の業平になると女の欲望を単に受け止めるというだけじゃない。

◆川上

はい、依巫（よりまし）という言葉を使いました。

◆小山

生矢だけを見ているといい意味では取れなかった部分が、業平になるとこうなってくるのか。それは平安時代の人物像としてということなんだは思いますが。

◆川上

社会背景があつてということですよ。

◆小山

これが川上さんが見つけれられた業平の魅力なんだと思って。

◆川上

多分そうなんです。

◆山本

はい。

◆小山

「生矢を成長させなきゃいけない」ともおっしゃってましたよね。

◆川上

そうですね。でも生矢は成長させづらかったです。伊豆に行った場面⁴も……。作者も途方にくれました（笑）。

◆小山

私にとっては衝撃的なシーンでした。

◆川上

よく梨子は耐えているよなあと自分でも書きながら思っていました。

◆小山

生矢が壊れてしまったという感じがしました。

◆川上

はい。ただその後、駄目なりに、結局は梨子が大人になったんですよね。そうすると生矢もそれにつられて大人になっていって。

◆小山

山本先生は男性の読者として生矢をどう読まれましたか。

◆山本

どうなんでしょうね。やっぱり魅力はないですよ、最初のほうはね。ちょっと空っぽな感じがしますけど。

◆小山

そうなんですよ。

◆山本

平安時代になってどうなるのかっていうところがもう少し読み込んでみないといけないと思いますけどね。高丘さんや高田さんになったりします。絡んできますから、そこで変わっていくようなところがあるのかなと思いますけどね。江戸時代のところは業平は出てこないんで。代わりに高田さんが駆け落ちをするんです。ですからその辺で交錯して何かイメージが交じり合うのかなっていう。

「高丘さん」の魅力

◆川上

だから最初書いているときは、江戸時代の「高田」は業平と高丘親王が混ざったような人物にしようと思っていたんですけど、どうしても業平が入って来てくれなかったんですよ。

◆山本

そうですね。そこまで入っていない。

◆川上

そう。まだ業平の良さが私にも分かってなくて、それが江戸時代篇だったんですよね。

⁴ 第16回、2018年9月11日号

◆小山

前にも私お話ししましたが、あそこで業平でも生矢でもない高丘さん、つまり高田が梨子の恋の相手として出てくるということで、梨子の世界がすごく広がったというのがありました。

◆川上

そうですね。あれで成長できたんですよね。梨子はもう本当に狭い世界で生きていた人間なので。まずは高丘さんのおかげです。

◆山本

高丘親王のことはそれこそ連載が始まる前からいろいろとご関心があって質問も受けましたけれども、この話の主軸として最初から高丘さんは重要人物だったわけなんですか。

◆川上

いや、調べていくうちに高丘親王が業平のおじだったという史実に驚いて。おまけに澁澤龍彦が好きなものですから、これはもう出すしかないなって。どういうふうにも機能的につながっていくかというのは分かっていなくて、分かっていると、でも小説って面白くない、書くのがつまらなくなっちゃうので、あえて分からずに書いていきました。

◆山本

結果としてこういう形になったという。

◆川上

はい。

◆山本

時間が変わったり、最後のほうは同時に二つの人格が入って来たりしますよね。

◆川上

そうですね。

◆山本

そういうところは、最初に高丘さんがかけた魔法ですよね。

◆川上

はい。

◆山本

魔法がかけられて。だからある意味じゃ高丘さんがいないと話が始まらないんだと思うんですね。

◆小山

『伊勢物語』をモチーフにして小説を書くというスタートで、『伊勢物語』を単に現代に移すという形にはしませんというのは最初におっしゃってましたよね。『伊勢物語』を使いながら川上さんの小説の中に融合させていって展開をさせる中で、夢が軸になってくるというのは、これも最初から考えていらっしたんですか。

◆川上

最初はタイムスリップというはっきりしたしかけも考えていたのですが。



◆小山

タイムスリップとおっしゃってしまいましたよね、最初。

◆川上

ただ、しかけを読み解くのは、読むほうも負担が大きいかないかと思ったんですよ。夢というものの存在は古典の中では大きいものでもありますので。

◆山本

そりゃそうです。

◆小山

『高丘親王航海記』⁵も夢がとても大事なモチーフとして出てくるので、何かうまくつながったなっていう。

◆川上

はい。

◆山本

高丘さんが出てこない一本筋がね。あれで一つ補助線じゃないんだけど、二つ筋が出てくることで世界が、物語ができてくるのかなと思いました。

◆川上

そうですね。強い筋交いが入ったという感じでしたね。

「まったき男」、業平

◆小山

生矢とのある意味一対一の閉じた夫婦関係から梨子がどんどん成長して世界が広がって行って、高丘さんとの淡い愛を経て、「三度目の恋」に着地するのは、業平がすてきだと思えなくなっていったのと連動しているんですか。



◆川上

業平はそもそも前提が「すてき」だと思うのです。そこをどう解きほぐすのかは迷って、結局小説の中では業平自身の面白みを全面に出して描くことはしませんでした。その意味でも、小説は『伊勢物語』からは距離をおいたところにあると思います。

⁵澁澤龍彦著。

◆有澤

山本先生いかがでしたか、その辺りは何か。

◆山本

『伊勢物語』は男性視点から書いてありますけれども、業平は男性から見たほうが、多分業平の魅力っていうかそういうものがあるのかもしれないですよ。今回女性のほうから見ておられるので、どうしてもただもてるだけの男みたいところがあるのかなという気がしました。

ですから今回読んでいて大変『源氏物語』的なものを感じたんですね。それは『源氏物語』は女性が作者で女性視点からたくさん書いてありますから、光源氏という人がどうして魅力的なのか、女性から見て魅力的なのかっていうことがいっぱい書いてあるわけですね。ですから源氏を読むと光源氏が空っぽだとか誰も思わないわけです。『伊勢物語』はそういう面がないと思うんですね。

◆川上

山本先生が、あの時代の物語で男同士の友情を描いたものは、日本のものにはほとんどなかったんだということをおっしゃっていたのが印象に残っていて。私の小説の中で、業平の妻と通じてしまう男がいますよね。

◆山本

ええ。

◆川上

その男は、女にしか好かれな男なのです。

◆山本

なるほど。

◆川上

けれど業平は、本当にきれいな玉のような魅力を持った男なんですね。

◆小山

「まったき男」という感じがしますね。

◆川上

そう、まったき男。だから男にとっては、ちょっと離れたところからまったき者を見ているので、あこがれの気持ちや高く評価する気持ちをいだけるだろうという気がするのです。ところが女にしてみると、そばに寄れば寄るほどつるつる滑っちゃうような、つかまえどころのない存在なんだなと、書いててどんどん思うようになりました。

業平には多分、定まってしまった業平像があるんですね。そこを私は破れなかったとも言えると思います。力が足りなかった。もっと自由な業平にしてあげてもよかったんですけど。そちらにはいかずに、高丘さんにその役を负ってもらったところが作者としてはありますね。

業平はもうちょっと生き生きした男のはずなんですよ。『伊勢物語』を読んだとき、訳したとき⁶に感じたのは。男との友情を大切にしたり、東下りをめそめそしながらしてみたりとか、ああいうところがかわいいんですよ。

⁶ 池澤夏樹編『日本文学全集』シリーズ。

◆山本

不遇とか。不遇、ちょっと出てきますけどね。もっともっと不遇な人だから、業平は。

◆川上

ええ、不遇なところもすごくあって、生矢がちょっと閑職に追いやられたくらいのもので済ませちゃったのは、最初に言ったように『伊勢物語』には申し訳ないような、『伊勢物語』を書いたとはとても自分では言えないなとは思いますが。業平を書くとしたらもっともっといろんな多面性がある男として書きたいし、書かないと変なことになっちゃうかなと思うんです。



◆山本

それはすごく面白かったですよ、でも。

◆川上

ありがとうございます。でも、業平自身のことは結局、私は書き終わってみて、まだつかめていないと思います。そこまで面白い男なんだなっていうのは思いますけれどね。もしかするとこれからの小説に、業平的な人が出てくるかもしれないですね。

◆山本

またお書きいただいて。

◆有澤

楽しみですよね。

謎の女性、「^{くすこ}薬子」さん

◆山本

私も高丘さんにずいぶんこだわるんですけど、薬子さん⁷も最後まで謎の人です。結局本人は出てこないわけですけども。

◆川上

はい。

⁷ 第29回（2019年4月9日号）で、高丘さんが、昔のかなわぬ恋の相手として「薬子さん」の名を口にする。

◆小山

銀座の女性だけでもんね、現代の。

◆山本

そう、銀座の女性でね、話の中に出てくるのですけど。そんな風に薬子さんが出てくるところが面白いですね。澁澤龍彦の世界なんだけど。だから何か『高丘親王航海記』を本歌取りしていらっしやるような感じで。

◆川上

『伊勢物語』だけでなく、今回の小説は『高丘親王航海記』の本歌取りでもありました。薬子の変というのは私歴史が不得意なのであまりよく知らなかったんですが、今回調べてみてとても興味を持ちました。『高丘親王航海記』では、薬子の変については触れてませんよね。

◆小山

そうですね。

◆川上

薬子はかなり不思議な女性ですよ。歴史上においても。



◆小山

あまり表には出てこないけれども、どこかで高丘さんの心の根っこの部分を、ガチッとつかんでいる女性として出てくる。それは『高丘親王航海記』を読んでいる人からしたら、すごくよく分かる感じがしますよね。

◆川上

面白いなって私が感じているので、彼女が出てくると、小説も生き生きする。

◆山本

なるほど。

女性と社会

◆小山

『三度目の恋』を拝読しまして、川上さんの女性ならではの視点がとても大きいなと感じました。

◆山本

本当にそうですね。

◆小山

山本先生も出産の場面なんかが、とてもリアリティーがあるということも質問票に書かれていました。私もそれだけじゃなくて梨子が自分の世界を広げていく上で、ただ単に恋愛や夫婦関係だけが重要なのではなくて、仕事を最後しますよね。仕事をして、外の社会との関わりを持って世界を広げるといのは、男性の小説家だったらここまでさせないかなという気がしました。単なる偏見かもしれないですけど。

◆川上

私も最初はそこまでいくと思ってなくて、それは平安時代の女の人たちの働き方に触発されました。

◆山本

なるほど。

◆川上

梨子が外に働きに行くという発想は私も最初はなかったんですよ。いつまでもかわいい梨子、困っている梨子なのかと予想していたんですが、どうもそれだけではなくてきたのは、平安時代を過ごしたからです。

◆山本

そうですか。

◆川上

平安時代の女の人たちには仕事があったという理解は、OK でしょうか？

◆山本

それはもちろん。

◆川上

よかった。

◆山本

仕事をしない人もいるわけですからね。

◆小山

子どもができたことで強くなるのかと高丘さんに聞かれて、そういうものじゃないと反発する場面がありますよね⁸。恋愛や結婚や出産だけで女性の成長を追いかけるのじゃなくて、仕事をする。社会に出て行く。最終的にそれがすべて重なり合うような形で、ナーちゃんとの関係も卒業じゃないですけど。乗り越えて次の段階に行くのが。



◆川上

そうですね。

◆小山

私はよく理解できましたけど、男性の方が書かれると、こうはならないかもしれないな、という気がしました。

◆川上

そうですね。男性視点で書くと、ここはなかなか難しいかもしれません。

今までも社会の中で女が属する場所については小説の中でたくさん書いてきたんですけど、今回は平安の女たちの働き方や男たちとの関係が、現代と違うということがだんだん本当に体感できたときに、いつもとは違う裏打ちをもらったような気持ちで、厚みが出たなと感じました。平安時代の、私たちから離れた、もう完了してしまった社会背景を自身の中に取りこんだことによって、梨子は変化をとげていったんです。

⁸ 第21回、2018年11月27日号

◆有澤

江戸時代篇でも、梨子は吉原という特殊な世界を経験して、現代に戻ったときに性風俗業界のことなどを調べたりしていますが、男女のことだけではなく、女性の職業の在り方に目が向けられているように思いました。吉原も文化の豊かさといいますか、洗練されている文化の一つの様相が描かれているなど。

◆川上

はい。おいらんとして働くことのプライドを持ちつつ、そうはいつでも職場としてはブラックであるという感じが書けたらなと思って。

「昔」と現代を往き来すること

◆有澤

梨子が、「江戸時代の自分だったら、もしくは平安の自分だったらこう思っているだろうけど、でも私はこう思う」と、様々な女性の視点から考えているのが興味深かったです。以前川上さんご自身が、昔の文化に納得できる場所とできないところがあるとおっしゃっていましたが、その感覚と重なっているのかなと思いながら拝読していました。

◆川上

その通りで、梨子としては自分の意識の中にある女房なり春月につつまむわけですが、でもそれでもって梨子が彼女たちに影響を与えられるわけではないんですよ。あくまで梨子の視点なので、彼女たちの視点ではないというのが小説内の原則ですね。だからこそ、何もできないからこそ、梨子はだんだん理解していったのかなというふうに作者としては了解しています。

◆小山

客観的な視点なんですね。

◆川上

客観的にならざるを得ないんです。そばにいて何もできないので。

◆有澤

社会的なことも含めて理解を深めていこうとしているということですね。

◆川上

そうですね、だんだんと分かってくる。でも現代に戻ってくれば全然違う世界なのが、書いていて面白かったです。

◆小山

平安篇は女房の視点になりましたよね。多分最初にお話を伺っていた時とは違って。当初は、梨子イコール正妻と伺っていました。

◆川上

そうです。女房とは考えていなかった。

◆小山

梨子が女房になったというのは、ワークショップで女房のことが話題になったこともあったのかなとも思いますが、正妻に梨子が重なる形よりももっと客観的に書きたかったということですか。

◆川上

その通りです。つまり梨子が正妻になってしまうと現代や江戸パートの繰り返しになっちゃうんですよ。春月と高田の関係は業平との関係ではないけど、結局は本人と本人。だから平安でも本人と本人だと広がりがない小説としてもたせられなくなっちゃって、そこはちょっと悩んでいたんです。そのときにワークショップで現代の女官の方が書いた本なども紹介していただいて、あっ、こんな関係の人がこんなそばにいる、これだと思って。助けてもらいました、あのときにも。

◆小山

正妻の姫さんは結局、梨子が現代と江戸でした体験を後追いでいくような形になりますよね。

◆川上

はい、そうですね。

◆小山

六位の蔵人という別の男性との関係も含めて。だから梨子が先に経験していた感情を姫様がなぞっていくというような、ダブルというんですか。そんな関係に思いました。

◆川上

そうですね。そして、でも姫は梨子よりはもうちょっと深いところにかざるを得ない境遇ですよ。そこが書いて面白かったです。現代だとそこまでいけないんです。平安の闇が深いというのが体感できたような気がしました。

◆小山

現代で梨子は散々、生矢との関係に悩んでいる、じゃあ同じことが平安時代で起こったら、どこまで諦めてどこまで苦しむのか。改めて通して拝読して、後追いという目で見ると、六位の蔵人が出てくるというのは、単に業平以外の男性との関係を持つだけじゃない意味があるのかな、と。梨子にとっての高丘さん、高田がそうだったような役割を、六位の蔵人がしているのかな、と私は読んでいて思いました。

◆川上

なるほど。そこは書いていてあんまり考えなかったんですけど、ちょっと違う形ですけども、やっぱり心の関係だけではなく体の関係ってというのがいったいどんな意味を持つのかという意味でいえば、対応するところですよ。ただ作者はそういうふうにはちゃんと分析的に考えないので、そこが先生方とお話する醍醐味です。ご質問を読んで、例えば普通に本が出たときのインタビューと全然違う質問なんです。それがすごいと思って。

作中の種明かし

◆山本

さっき澁澤龍彦さんの話が出てきましたけど、私ね、澁澤龍彦っていう種明かしが突然出てきて、あそこがすごく面白かったです。

◆川上

それは？

◆山本

梨子知らないんですね。その辺がね。あの書き方がね。『伊勢物語』もちょいちょい出てくるし、それから江戸時代の吉原の案内記みたいなのが出てきて、種明かしが上手だなと思いました。『源氏物語』もそうなんですよ。

◆川上

そうなんですか！

◆山本

桐壺の巻に長恨歌の屏風が出てきたり、それから浮舟が身を投げる前に、生田川説話の話をも自分で思い出したりするんです。紫式部は自分が元にしたものを、読者に上手に明かしていくんですね。同じように思いました。

◆川上

おこがましいです、紫式部に。

◆山本

そういう出され方が非常に上手だなと思って。



◆川上

引用はもともと好きなんです。『光ってみえるもの、あれは』という初めての新聞小説を書いたときに、必ず1章ごとにひとつ詩を引用するっていう縛りで書いたりもしました。

◆小山

読者に情報をちら見せするような形は、『源氏物語』にも確かにありますね。

◆山本

そのほうが『伊勢物語』をそのまま小説に変えたというのではないっていうのがよく分かって面白いですよね。

梨子と生矢の関係

◆山本

それでタイトルです。最初からもちろんタイトルはこういうタイトルでしたけど、私たちは連載を読むわけでしょ。だからこれで一度目。で、二度目の恋はどれなんだろうとか考えるわけですね。

◆川上

そうなんですよ。

◆山本

三度目はどこだろうとか。

◆川上

そうなんです。

◆山本

最後に三度目はこれからだと言われてワーンとずっこける。

◆川上

最初のもくろみでは、生矢に一度目二度目三度目の恋をするはずだったのが、全然なっていなくて（笑）。

◆山本

そうなんですか。

◆川上

どんどん変わっちゃうんです、最初の計画は。

◆小山

そうでしたよね。私もそう伺っていたと思います。

◆川上

そう。何かいろいろあった末、三度目に彼に本当に恋をするみたいな話はずだったのに。

◆山本

なるほど。また戻ってくる。

◆川上

結局梨子は生矢から卒業しちゃいました。ご心配をお掛けしまして（笑）。

◆山本

とんでもない。



◆小山

結局ナーちゃんは梨子の内側には入れないままなところがあります。

◆川上

そうですね。それが夫婦の実情というところもあるかもしれません。

◆小山

このあたりの夫婦の機微について、きっと「そうなのよ」と思いながら読んでいらっしゃる方も多いただろうなと思いました。

◆川上

そうなのよと思う方と、いやそれは違う、もっといい夫婦関係もあるよと思う方と、両方いらっしゃると思うんです。

◆有澤

ナーちゃんが、ただ元気に働きたいだけなんだみたいなことを言うのを聞いて、梨子が意外に思う場面がありますね。業平にしても、姫さんの女房である梨子の目線から語られるので、男性社会における業平像について詳しくは語られません。夫婦はお互い様だなと思いました。

◆川上

そうなんですよ。だから男性がこれを読むと、もっと言いたいことがあるんじゃないかなと思うのですが。山本先生はおっしゃりたいことがあるんじゃないかと（笑）。

◆山本

ただ業平には不利ですよ。

◆川上

そうです。業平には不利です。

◆山本

そりゃ仕方がない。

◆川上

ただこの人たちは離婚しないと思うんですよ。愛はあるんですよ。その愛は、不可思議です。連れていってもらいました、『伊勢物語』に。遠いところまで。

◆小山

長い旅だったような感じがしますね、本当に。

◆山本

高丘さんの魔法で、魔法が終わって小説も終わるわけですね、さらに言うたらね。

平安時代の暮らし

◆小山

平安時代に対して憧れがある方は、特に女性には多いと思うのですが、十二単のお姫様が好きで、恋物語の展開する世界への憧れが主でしょう。そういう世界とはやっぱりかなり違う。もっと生々しい。

◆川上

そうですね。今のものを描写するように描写し、それで、小山先生に教えていただいた京都の風俗博物館⁹にも行ってきて。

◆小山

そうですか。

◆川上

あそこがすごくまた、参考になりました。

⁹古代から近代にいたるまでの日本の風俗・衣裳を実物展示する博物館 (<http://www.iz2.or.jp/>)。

◆小山

楽しいですね。

◆川上

楽しいし、十二単をどうやって着るってということがようやくあそこで分かりました。立体的に全部展示してあるので。

◆小山

ありますね。

◆川上

宴会のところでなど¹⁰も大いに助けられました。

◆小山

風俗博物館は女房の住空間がとてもよく分かりますよね。

◆川上

はい。

◆小山

等身大で十二単とか見ると、なるほどと思いますよね。



平安時代の食事

◆川上

取材のために、奈良時代の食事を食べに行ったんです。奈良のホテルに。レシピは平城京跡出土の木簡を参考にしましたそうです。

◆山本

はいはい、書いてある。

◆川上

はい。こんなものを納めたということが書いてあって、それを調べている学者の先生たちにお尋ねして、こういうものが納められているんならこれを作ったはずだということで、どんどん復元していったという食卓があるんです。食べに行くと、当時の着物も着せてくれて、明かりも当時のもので。

◆山本

そうなんですか。

◆川上

お酒も白酒しか出ない。飲み放題ですというからビールは？と聞いたら、当時にはなかったので出ませんということでした（笑）。

◆小山

おいしかったですか、その復元料理は。

¹⁰ 第35回～37回（2019年7月9日号～同年8月9日号）に、平安時代の食事について詳しい描写がなされており、「蘇」や「干し蛸」、「鮑」、「唐菓子」などが登場する。

◆川上

とてもおいしかったです。魚をちょっと干したものとか、肉を干したものもあれば、煮てあるものもあった。以前、平安の食べ物の表をいただきましたよね。

◆小山

岡田さんが用意してくださいました¹¹。

◆川上

資料と同じような材料が本当に使われていて楽しかったです。

吉原の描写

◆有澤

江戸時代篇で申しますと、最初に梨子が吉原へ売られて行く場面で、猪牙舟¹²に乗って、ここはこういうところだって言われながら川を進む描写¹³などは、自分も一緒に乗って景色を眺めているような感じがしました。

◆川上

あれは『江戸吉原図聚』¹⁴の文庫版を読んで、自分で絵を描いてみたんです。

◆山本

なるほど。そうですか。

◆川上

ここをこう行くと、するとこっちの水路に入るとこれでとか。文章で読んでいるだけでは分からないので、自分が乗ったとしたらって感じで。

◆有澤

まるで映像を観るように読めたので、どうやって想像なさったのかなと思っていました。

◆川上

分かりました？

◆有澤

すごく分かりました。

◆川上

よかった。文庫本の中にロケハンに行って、ここの道をこう通って行こうみたいな、そういう気持ちで読んで、それを自分のカメラで写したのを描写したという、そういう感じなんです。

¹¹ 岡田貴憲氏（国文学研究資料館助教）。2018年度のワークショップに参加し、資料などを提供した。ワークショップの様子はこちら→https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/kawakami_301204.pdf
岡田助教による「ないじえるレポート」はこちら→①
https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nijlreport_okada_1.pdf
②https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nijlreport_okada_2.pdf

¹² 江戸時代、吉原へ通うために多用された小舟。

¹³ 第10回、2018年6月12日号

¹⁴ 三谷一馬著。

◆有澤

そうなんですね。江戸時代の洒落本¹⁵などでは、情景が俯瞰で書かれていることが多いので、梨子と一緒にその世界に入り込んでいるような描写が、とても斬新に感じられました。



◆川上

そこはがんばって書きました。江戸パートもそうですし、平安パートも同じなんですよ。風俗博物館に行って、実際に見て、この部屋で業平と寝るとしたらどの辺にふとんを敷くのかとか、女房は庇のどの辺に居るのかとかを想像して。資料を写したようには書きたくなかったです。先生方から耳で聞いてお顔を拝見していろいろ教えていただいた2年半前に、人が生きてたんだっていうのが分かった気がしたのが、実感の最初でした。以前山本先生が業平は移動の時馬で行ったか徒歩で行ったかというお話もしてくださいましたし。あの、高安の人たちの由来の可能性についても教えてくださった¹⁶。

◆山本

そうですね。

◆小山

渡来人説ですね。

京都の景色は平安時代とつながっている？

◆川上

山本先生、小山先生とご縁の深い京都という場所は、今も平安とつながっているという印象があります。

◆小山

どうでしょうね。

◆山本

やっぱり気持ちかね、一度応仁の乱で全部焼けてるんですけどね。地上部分は全部なくなっていると。

◆川上

京都の方々の「この間の戦争」というのは、応仁の乱をさすと聞いたことがあります。

¹⁵ 江戸中期に流行した、会話体の読み物。吉原や深川など、遊里の風俗や美意識を活写した。代表作のひとつ『春色梅児誉美（しゅんしょくうめごよみ）』は、岩波文庫などでも読むことができる。

¹⁶ 前出 2018年3月6日の座談会における、山本先生の発言などを示す。

◆山本

応仁の乱より古い建物は、千本釈迦堂と三十三間堂だけですからね。

◆小山

私も5年間東京に住んで、また京都に戻って感じるの、ごく当然のように月が山から出て山に沈む。太陽が山から出て山に沈む。通りが碁盤の目になっていて、東西南北がすごく整然としているという、ああいう空間は今でもごく自然にあります。

◆山本

変わらないものはたくさんあるね、変わらない。

◆小山

ここからここまでが京都の範囲だということも変わらない。東西と北を山に囲まれていて。今はもう埋め立てられていますけれども、南は湿田だったという。空間的なものに関しては、京都にいるとよく分かるというのはありますね。

◆山本

私名古屋の大学でこの間教えていて、月は山の端に沈むっていうのは彼らは分からなかったですね。

◆川上

東京でも分からない。

◆山本

山の端に月は沈むんだよって言ったら、山の端遠いですよとか言ってましたね。

◆川上

遠いですよね。

◆山本

平野なんでもん、ずっと。濃尾平野っていうか。ずっと向こうへちょっと山があるんですよ。だからあれは分からない人もいる。

◆小山

「(行く末は空も一つの武蔵野に) 草の原より出づる月影」という歌があるんですよ、『新古今集』¹⁷に。「草の原より出づる月影」というのは、別に何でもないように思いますが、でもそれって京都の人からしたらありえないわけですよ。

◆川上

京都は山から月がでるのですね。

◆小山

そうなんですよ。だから草の間から月が出てくるのは、それは関東平野の中でしか見られない、そういう異質な光景だということも、京都市内に引っ越して「なるほど、そうか」と思ったんですよ。

◆川上

でも今東京はもういっぱい建物建っちゃって、山のほうに行かないと野原はないですね。

¹⁷ 秋上・422・藤原良経

◆小山

ビルから出てビルに沈むって感じがあります。

『伊勢物語』は、物語の「原型」

◆有澤

作品のなかで、何度か『伊勢物語』六段目の「芥川」の場면을繰り返す¹⁸という構造がありました。たとえば春月は『伊勢物語』を読んでいて、六段目をよく知っているはずなのに¹⁹、またそこに引き寄せられていくような発言をしてしまったりだとか。それがまた平安時代でも起こったりしますね。

◆川上

物語というのは何かの原型なんですけど、原型がポンポンって短くたくさん置かれているのが『伊勢物語』で。春月が気付いていないっていうふうなご指摘、面白いと思います。よく考えてみたら確かに『伊勢物語』を知っている春月なら、あれ、今自分は「芥川」の段の状況と一緒に、と思ってもよさそうなのに、思わない。でも人間ってそういうもんじやないかって。

◆山本

そうですね。

◆川上

もし万一自分が同じシチュエーションの中にいたとしても、私自身も『伊勢物語』とそっくりとは思わないような気がするんです。気付かないっていうか。そのような普遍を抽出してみせたからこそ『伊勢物語』ってこれだけ長く残っているのかなと思います。

◆山本

そうですね。

◆川上

誰にでも自分にあてはまる段があるのではないかと。

◆有澤

自分の段、探してみますね。

ところで、この座談会を前にもう一度『伊勢物語』を読み返したんですけども、2年前と少し読み方が変わりました。

◆川上

それは興味深いです。

◆有澤

梨子を通して『伊勢物語』を眺めたりだとか、先生方からさまざまな魅力をうかがったりしたことが大きかったのかと思います。以前は感じなかったのですが、物語に余白があると感じました。それから昔は業平に対して、不甲斐ないと思って結構いらいらしながら読んでいたのですが（笑）、いつもあらゆる事象を心たおやかに受け入れながら真剣に

¹⁸ 現代、江戸時代、平安時代で、それぞれ六段目を想起させる描写がある。

¹⁹ 第21回（2018年11月27日号）で、おいらんである濃紫のおねえさんが読んでいる版本の『伊勢物語』と一緒に眺めている。

悩んでいる業平像が見えてきて。「こんなふうに『伊勢物語』を読めるようになっていく」と気付いて嬉しかったです。

◆小山

私、今年度大学の授業で初めて『伊勢物語』を取り上げたんですよ。それでパロディーを作らせたんです。

◆川上

面白い！

◆小山

江戸時代の『仁勢物語』²⁰や、川上さんの「ignis」²¹のコピーも配ったんですよ。東下りのところですね。いろいろな形で『伊勢物語』を敷いた作品とがあることを紹介した後で自分たちで作ってみて。第九段か初段。もしくは自分で選んできてと言って、現代に落とし込んでどんなふうに学生たちが換えてくるのかなというのをやってみました。川上さんがおっしゃった「典型」というのは『伊勢物語』の内容に関するんですけど、物語のフォーマットがシンプルなだけに色々なバージョンが出てきて。

◆川上

そうですね、きっと。

◆小山

そうなんですよ。優秀作品をコピーして学生に配りました。

◆川上

それは読んでみたいです。

おわりに

◆川上

私は最初に言ったように、この仕事はとにかく面白かった。古典が苦手だったので、この企画がなければ絶対に書けなかった小説です。でもこれを書いたことによって、自分も少し変わったかなと思います。心からみなさまに感謝しています。

◆有澤

本日はどうもありがとうございました。

◆山本

どうもありがとうございました。

◆小山

ありがとうございました。



編集責任：有澤知世

²⁰ 寛永 16～17 年（1639～40）頃成立。『伊勢物語』の一二五段を逐語的にもじった作品。王朝的な雅の世界を、近世初頭の世相・風俗をとり入れつつ俗な世界に転換して、滑稽を生み出している。『日本文学大系』（岩波書店）に収録されている。

²¹ 川上弘美『なめらかで熱くて甘苦しくて』（新潮文庫、2015 年）に収録。